

インド少数民族の出版文化

白鷗大学経営学部講師

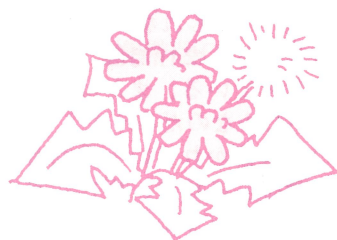
小 林 正 人

「クルフ語」という言語の研究のため、昨年
からインドのジャールカンド州に行っている。
インド東部、デカン高原の山岳地帯に、「ウラ
オン人」と呼ばれる少数民族がおよそ 200 万人
住んでいるが、そのうち約半数が話している言
語がクルフ語である。ウラオン人は歴史の荒波
のなかで他民族に追われて何度も移住をした民
族として知られ、彼らの話すクルフ語はインド
東部ではきわめて珍しいドラビダ語族に属して
いる（ドラビダ語族の言語はそのほとんどがイ
ンド南部の 4 州で話されている）。デカン高原
の山岳地帯には少数民族が数多く居住していて、
中には定まった居住地をもたず、森から森へ狩
りをして暮らす部族もいるが、ウラオン人は多
くが農業に従事していて、農村で独自の文化を
守って暮らしている。

インドでは日本に比べ、現地の言葉での出版
があまりさかんではない。私はジャールカンド
州へ行く列車を待っている日に、ちょうどニュー
デリーで開催されていた第 16 回世界ブックフェ
アを見に行ったが、いくつもあるパピリオンの
うちで現地語の出版社の入っているものは一つ
しかなかった。インドにはヒンディー語以外に、
憲法の付表 8 で公用語とされている言語が 17 も
ある。さらに 4 言語を追加する補正条項が昨年
暮に議会両院を通過したので、各地域の言語で
の出版の機運は高まっているはずだが、むしろ
憲法では「暫定的な」公用語でしかない英語の
出版社のブースばかりが目立っているように感
じた。インドの学校は、授業が英語で行われる
か現地語で行われるかによって分かれており、
希望に応じて選べるようになっているが、近年
の情報技術をはじめとする分野での経済成長の

なかで、より高い教育を受けさせたいと願う家
庭が増えており、そのため進学に有利な英語で
の教育を選ぶ親が多いことを反映しているのだ
ろうかと思った。ただし現地語の出版社のパピ
リオンはなかなかの盛況で、ヒンドゥー教の聖
典である「バガヴァッド・ギーター」や「ラーム・
チャリット・マーナス」などを次々とフェア価
格で買い求めていく家族連れを見て、社会が急
速に変化している中で変わらないものもあると
感じてほっとした。ブックフェアを見ていると
他にもおやっと思うことが多く、例えば簡便な
小六法を買っておこうと法律書の店で聞くと、「ヒ
ンドゥーかムスリムかクリスチャンか」と聞き
返され、民法が宗教ごとに違うと知らされたり、
憲法のポケット本が欲しいというと「そんなも
のではない」という返事で、そういえばインドの
憲法は 395 条もある長大なものだったことを思
い出したりで、出版を通して社会が見えるよう
で勉強になる一日だった。

さて、経済発展のめざましいそのようなイン
ド社会にあって、クルフ語による出版活動はど
うかという、2000 年に少数民族地域を主体と
するジャールカンドが新州として成立したことで、
これまでにない高まりを見せているように感じた。



そもそも文字をもたないウラオン人にとっては、民話や神話、歌といった口承伝承が文学の中心なので、ラーンチー大学に在学するウラオン人学生にそれぞれの村の伝承を語ってくれるよう呼びかけたところ、1週間で十数人の学生が来て録音してくれた。特に村じまんの歌を歌うのが好きで、中にはりっぱな自作の詩を持ってきて恥ずかしそうに朗読してくれた学生もいた。州都であるラーンチー市の書店には新刊のクルフ語による詩集や文芸雑誌が数点だが置いてあり、まわりの言語に呑み込まれているのではないのだと感じてうれしく思った。クルフ語の出版物はこれまで出たものをぜんぶ合わせても本棚一

つに満たないほどの数で、一点当たりの出版部数もごくわずかだが、仙花紙にインクの油のにじんだ質素な本を大切に読みまわしているらしく、学生たちは出た本はみな読んで知っているようだった。クルフ語の出版が発展していくことに希望を感じた旅行だったが、そうは言っても大部分のウラオン人はまだ貧しく、小学校にも通えない子供が多いというので、せっかくクルフ語の本が出て読むことのできない人が多いだろう。私もせめて自分の研究が終わるまでには、いろんな村の長老の昔話を集めたテープを作って、ささやかな恩返しとしてウラオンの子供たちに聞かせてあげたいと思っている。

懲 り る

白鷗大学女子短期大学部助教授

藤 浪 英 也

私が学生諸君と接していて「懲りる」ことを知らないのではないかと思うことがある。

以前、安部譲二氏の書いた『塀の中の懲りない面々』（文芸春秋 刊）という本が大ベストセラーとなり、映画化され、またテレビドラマにもなったことを記憶している諸君も多いと思われる。ここで描かれている『塀の中』とは刑務所のことで出所と入所を繰り返す受刑者たちの「滑稽」と思われるほどの生態である。著者は、本来懲らしめのために刑に服している受刑者たちが、懲りもせずまた再び悪事を行い『塀の中』に舞い戻ってくるという受刑者たちの姿を自分自身の体験を踏まえてユーモラスに書いた。自分自身の経験のなかから描いたことが、驚きでもあり、読者の関心を引いたものである。

「懲りる」とは『広辞苑』第五版によると「ひどい目に会って、二度とすまいと思う。」こととある。それでは、なぜ懲りもせず、再び同じ「過ち」を繰り返すのであろうか？

一つには、その行「過ち」が『塀の中に』入ってもいいとおもわせるほど甘美な誘惑を持っているためなのかもしれない。

また、自分の行った行為は「過ち」などではなかったと考えている、または「過ち」だとは考えたくないためなのだろうか？

この本の中に書かれている受刑者たちは、その「甘美な誘惑」に負け、再び「過ち」おかし『塀の中に』戻ってしまうのであるが、私が

学生諸君と接していて「懲りる」ことを知らないのではないかと思うのは後者の方である。すなわち、自分の行った行為は「過ち」などではないと考えている、または「過ち」だとは考えたくないため、「懲り」もせず同じ失敗を繰り返す学生が多いのではないかと思う。「過ち」を反省することなく、それを糧としなければ、また同じ「過ち」を繰り返すの当然の帰結であり、成長することはできない。ここで大事なことは「過ち」すなわち「失敗」を素直に認め、その原因を追究し、今後の行いにその「失敗」を生かすことにある。よく言われるように「失敗は成功の母」とすることである。

ここに一冊の本がある。東京大学工学部の教授として学生に機械設計を指導していた畑村洋太郎氏の書いた『失敗学のすすめ』（講談社 刊）である。この本も大ベストセラーになり世に「失敗学」という言葉を認識せしめた。いままで「失敗」という言葉につきものであった暗いイメージを「成功への糧」にする「明るい失敗」とすることのすすめである。

この本は非常に示唆に富む本である。見出しだけを拾っても「よい失敗と悪い失敗」、「失敗は成長する」、「失敗情報は隠れたがる」、「失敗原因は変わりたがる」、など、これらは是非、学生諸君自身が自ら読んで、自分のものにしてもらいたいと思う。

本来失敗した人間は失敗を恥と思い、その失

敗を人に知られることを嫌がるものである。このため、失敗した場合、それをあたかも失敗でなかったかのように装うか、またはその失敗を早く忘れてしまおうとする。これは自分自身のプライドが傷つかないようにする行動の表れだと思う。しかしこの本にも書いてあるように『人が自分にとって未知のものを始めるとき、そこには必ず失敗という結果が待っています。(中略) 損な失敗をした瞬間「痛い」とか「つらい」「悔しい」という気持ちが心の中に生じたならば、その人はしめたものです。(略) その瞬間に、その人の中に新たな知識を受け入れる素地ができたということです。』つまり、未知のことを行えば誰でも失敗するのはあたりまえのことで、もうまく行ったとしても、それは、ただ運がよかったに過ぎないのではないかと私は思う。失敗を正しく見つめ、痛い目にあった失敗を素直に受け入れる(懲りる)ことによって、「も

うこのようなことはすまい」と思い、人は成長するのだ。

また、筆者はこのようなにも書いている『向学心の強い初心者ほど「痛い」「つらい」「損をした」という気分を味わい、強い挫折感を感じるものです。(中略) 最初のうちに、あえて挫折経験をさせ、それによって知識の必要性を体感・実感しながら学んでいく学生ほど、どんな場面にも応用して使える真の知識が身につくことを知りました。』

若いから、学生の時だから許される「失敗」があります。いまこの時を大事にしてください。いろいろのことを経験し将来の糧にしてもらいたと思います。そのためには「失敗」をごまかしたり、隠すのではなく、素直に受け入れることが大事なのです。誰でも失敗はするのだから。

図書館ニュース

■ 携帯電話(インターネット対応機種)から蔵書検索、貸出状況、休館日などのお知らせを見ることができるようになりました。

アクセス方法：携帯電話用ホームページ (<http://osirabe.net/jip/hakuoh/>) にアクセスしてください。

※【対応機器】NTTドコモ、Jフォン、auの携帯電話

注意事項

- ・ 携帯電話版 OPAC は、所蔵情報を簡略化して表示しておりますので、詳細を見たいときは、パソコンにて検索してください。
- ・ 携帯電話の機種によっては、ホームページが表示されない場合があります。その場合には、直接 URL を入力してください。
- ・ 携帯電話からの通話料は、利用者の負担となります。
- ・ 携帯電話の利用禁止の場所では、マナーを守って利用しないようにしましょう。

OPAC検索結果表示の変更

平成16年1月以降に登録された図書は、OPACでの“検索結果一覧”が複数冊(全集、シリーズ等)で 1件と表示される場合があります。(携帯版OPACも含む)

詳しくは掲示板、ホームページ等で確認してください。



新着図書 ピックアップ

007.3/NI	「ここまで来ているモバイルマルチメディア」 新美英樹編著 日経 BP 企画	Y/KO/3	「『寝る子は育つ』を科学する」 松本淳治著 大月書店
069/NI	「二十一世紀博物館」 西野嘉章著 東京大学出版会	377.6/KO	「私の海外留学体験記」 ICS国際文化教育センター編 大修館書店
141.5/II	「質問力」 飯久保廣嗣著 日本経済新聞社	404/TA	「科学書をめぐる 100 の冒険」 田端到、佐倉統著 本の雑誌社
293.4/TSU	「イギリスを旅する 35 章」 辻野功編著 明石書店	493.12/SH	「太りゆく人類」 エレン・ラペル・シェル著、栗木さつき訳 早川書房
♡————♡		△————△	
312.53/MI	「アメリカのパワー・エリート」 三輪裕範著 筑摩書房	519.8/SA	「地球環境とりサイクル」 産業技術会議編 産業技術会議
320/YO	「法律はこうして生まれた」 読売新聞政治部著 中央公論新社	547.48/AN	「仕事に役立つ Web 技術キーワード事典」 アंक著 エムディエヌコーポレーション
326.26/OK	「迷宮のインターネット事件」 岡村久道筆 [ほか] 編集 日経 BP 社	675.3/NA	「キリン[生茶]・明治製菓[フアン]の商品戦略」 長沢伸也、川栄聡史共著 日本出版サービス
329.3/MA	「国際公務員をめざす」 松元洋、渡邊直一著 時事通信社	689.3/KO	「東京ディズニーランド[継続]成長の秘密」 小松田勝著 商業界
♡————♡		△————△	
335.13/GH	「カルロス・ゴーン経営を語る」 カルロス・ゴーン、フィリップ・リエス著、高野優訳 日本経済新聞社	E/MI	「ノブコさんに聞いてみよう」 宮北岳人絵・文 新風舎
K4/NA	「なぜ働くのか」 PHP 研究所	780.7/OK	「あなたが変わるトレーニングの本」 岡田一彦、杉山正明、山崎祐司著 一橋出版
361.3/NI	「交渉ハンドブック」 日本交渉学会編 東洋経済新報社	804/IN	「言葉に思いを込める技術」 稲垣吉彦著 自由国民社
365/TA	「ついていったら、こうなった」 多田文明著 彩図社	910.26/OG	「あらすじで読む日本の名著」 小川義男編 楽書館

ささやき

図書館では様々な新聞を取り揃えています。経済・産業・金融・スポーツ・地域新聞・英字新聞等々。海外から輸入された外国語の新聞もたくさんあります。韓国語、中国語、フランス語、英語など、語学力を生かして海外の情報を読んでみてはいかがでしょうか。

平成16年4月1日 発行
編集 図書館だより編集委員会
発行 白鷗大学総合図書館
〒323-8585 栃木県小山市大行寺1117
(0285) 22-9737 (直通)
ホームページ <http://www.hakuoh.ac.jp>
印刷 株尚文堂印刷所